

なかむら うこう
中村 雨紅



しょうわ ねんごろ うこう
▲昭和31年頃の雨紅

ゆうや こや
夕焼け小焼け(大正八年作)

ゆうや こや ひく
夕焼け小焼けで 日が暮れて

やま かね な
山のお寺の 鐘が鳴る

てて みなかえ
お手々つないで 皆帰ろ

からす いっしょかえ
烏と一緒に帰りましょう。

こども かえ あと
子供が帰った 後からは

まる おお つけ
円い大きな お月さま

ことり ゆめ み ころ
小鳥が夢を 見る頃は

ぞう きん ほし
空にはキラキラ 金の星。

なかむら うこう
『中村雨紅詩話集』より

うこう 雨紅のおいたち

「夕焼け小焼け」という童謡を知っていますか。市内では夕方になるとどこにいても耳にするあのメロディーです。この童謡の詩を書いたのが、中村雨紅です。

中村雨紅は、明治30年(1897年)2月6日、宮尾神社宮司であった父・高井丹吾、母・シキのもと東京府南多摩郡恩方村上恩方の宮尾神社の社務所で生まれ、宮吉と名づけられました。ですから、雨紅の本名は高井宮吉といます。明治42年



▲ 日暮里時代の雨紅(写真中央)

(1909年)に上恩方尋常小学校(現在の恩方第二小)を卒業し、明治44年(1911年)恩方村報恩高等小学校を卒業、その後、大正5年(1916年)に東京府立青山師範学校を卒業して、この年に東京府北豊島郡日暮里町第二日暮里小学校の教師になりました。大正6年(1917年)、雨紅が20歳のとき、おばの家である中村家の養子になりました。その翌年、日暮里町第三日暮里尋常小学校に転勤となります。

師範学校で学び、教育の理想を持って教師になった雨紅でしたが、子どもたちの現実の姿はすさんだものでした。貧しい家庭の子どもが多く、子どもたちが店先から食べ物や盗んだり、授業中いなくなったり、教室に窓から土足で出入りしたりする姿を見た雨紅は、子どもたちに道徳心や豊かな感受性と自己表現力を育てる情操教育の必要性を感じました。そして、この頃から学級文集を始めるとともに、童謡を書き始めたのです。

ゆうや こや たんじょう 夕焼け小焼けの誕生

大正時代の中ごろ、「子どもたちに芸術性の高い童謡や童謡を」という意識が高まり、『赤い鳥』や『金の船』(後に『金の星』)などの児童文芸雑誌が生まれます。雨紅の作品も『金の船』に、大正10年(1921年)高井宮のペンネーム(文章を書くときに使う名前)で、童謡「お星さん」などがのりしました。特に童謡「お別れの先生の話」は野口雨情(童謡詩人)などにとてもほめられました。しかし、童謡を書くことは勉強を教える邪魔になると校長に叱られ、雨紅は道を歩きながら考えられる童謡作りに専念するようになりました。

ところで、中村雨紅というペンネームには、養子先の「中村」という姓と、野口雨情のように偉くなりたいと「雨」を一字もらい、「紅」はそれに染まる、似かようという思いが込められています。

大正12年(1923年)に「夕焼け小焼け」が発表されました。ところがその楽譜は世の中に
でまわる前に、関東大震災のため灰になってしまったのです。わずかに残った13部ほどの
楽譜が、人から人へと歌い広められていきました。

雨紅は仕事から帰るとき、八王子駅からふるさと恩方までの約16kmの道のりをいつも歩
いて帰りましたので、途中で日が暮れていくこともよくありました。「夕焼け小焼け」は、そん
なふるさとへの帰り道、夕暮れ時の山里を歩きながら、幼い頃の山国の景色やなつかしさな
どの感傷も加わり作られたそうです。

この年雨紅は、漢学者だった本城問亭の次女千代子と結婚しました。中村家との養子縁組
を解消し、名前も高井に戻ります。大正13年(1924年)には長男の喬が生まれました。
大正15年(1926年)日本大学高等師範部を卒業後、神奈川県立厚木実科高等女学校の
教師(現在の県立厚木東高校)となりました。雨紅は東京から厚木に引っ越し、昭和2年
(1927年)、長女・緑が生まれました。厚木に移ってからの雨紅は、童謡・詩などを作り続け
ますが、高校の国語教師として昭和24年(1949年)に退職するまで、本名の高井宮吉で通
しました。

晩年の雨紅

昭和31年(1956年)雨紅の60歳の還暦を祝い、恩方村の有志が宮尾神社境内に「夕焼け
小焼け」の碑を建てました。その後、恩方の観栖寺・宝生寺・興慶寺・浄福寺・心源院に「夕焼け
小焼け」ゆかりの碑や鐘などが作られ、作曲家草川信の故郷である長野県の各所にも碑が建
てられています。昭和45年(1970年)には、雨紅がどうしても心残りだと、興慶寺に「ふる里
と母と」の碑を建てました。

昭和46年(1971年)11月、雨紅は神奈川県立厚木病院に入院し、翌年5月8日、75歳で
亡くなりました。雨紅は生涯、ふるさとをメインテーマに童謡や詩を作り続け、今でも多くの
人々にうたいつがれています。

ふる里と母と (昭和四十年作)

今も帰ればふるさとの

岡に残るよ傘松よ

村のはずれの閻魔堂

ネンネコサラサラ トントロリ

川の瀬音も子守唄。

おいしいそうでも蛇苺

きれいな実でも牛殺し

その葉取るなよ実を取るな

いつもやさしくあたたかく

今も聞える母の声。

『中村雨紅詩謡集』より

しら 調べてみましょう

ひとつのテーマについて調べる時、何冊かの本を調べることは、とても大切なことです。次にあげる参考文献は、図書館にある本の中で、小・中学生のみなさんにもわかりやすいものです。自分で調べ、まとめてみましょう。市内のどの図書館に所蔵しているかは館内OPACで検索、または職員へおたずねください。

※☆印のついているものは、特に小学生におすすめのものです。

『夕焼け小焼け 中村雨紅の足跡』 厚木市立中央図書館／編 1990年
中村雨紅にまつわる話が詳しく書かれている。雨紅が作った校歌・園歌・音頭などの作品概略一覧や年譜あり。

『夕焼け小焼け』(パンフレット) 白井禄郎・緑／編 1999年
雨紅について簡単に紹介。作品の紹介や年譜あり。

『物語夕焼け小焼け』 依田信夫／著 2001年
雨紅だけでなく、夕焼け小焼けの作曲者である草川信についても書かれている。物語調で詳しく書かれている。

『詩魂 恩方(ふるさと)に生まれて』(パンフレット)
八王子市中央図書館／編 1997年
雨紅の年譜と恩方の雨紅ゆかりの碑などの所在図あり。

『追想 中村雨紅』 八王子市中央図書館／編 1986年
中村雨紅をしのぶ会座談会の記録。雨紅にまつわる話が話し口調で書かれている。

☆『郷土みてある記』 八王子市生活文化部広報課／編 1995年
小学校の先生が、八王子の歴史や、関係の深い人物や動植物、事柄を小学生にもわかるようにやさしく解説したもの。

中村雨紅が書いた本

『夕やけ小やけ中村雨紅詩謡集』 1971年

『中村雨紅詩謡集』 1971年

『抒情短篇集 若かりし日』 1975年

『中村雨紅 お伽童話 第1集～第3集』 1985年

『中村雨紅 青春譜』 1994年

編集・発行 八王子市中央図書館

平成22年(2010年)12月

令和5年(2023年)1月 改訂